

## 「総合文化研究(トランス・カルチュラル・スタディーズ)」創刊にあたって

東京外国語大学総合文化研究所所長

西永良成

「世界各地の文化・文学・芸術・人間科学の伝統と現状を総合的かつ複合的に調査研究することを目的」とする東京外国語大学総合文化研究所は、平成八年四月一日に本学外国語学部の付属施設として発足した。海外事情研究所、語学研究所の発足後約三十年という、いたって遅い出発である。近年大学内外を取り巻く環境の急激な変化は、国際的かつ学際的な研究を促し、本学に勤務する文学、人間諸科学の研究者としても従来のような国民国家単位の文化、文学研究とか、十九世紀に起源をもつ学問分野の枠内での思考などに安住することはもはや不可能になつてきた。そのような認識を受けて発足した総合文化研究所は当面、文学の伝統と刷新をめぐる国際比較、二十世紀表象文化の地域性と世界性の連関の調査、異文化研究の原理と方法の理論的探究、さらに情報革命による人間諸科学のパラダイム変換の確認と展望などを活動の主軸としてゆくつもりである。

研究所には定期的に成果を世に問う研究誌の存在が不可欠である。ここに創刊される「総合文化研究(トランス・カルチュラル・スタディーズ)」は上記の理由によつて発足した東京外国語大学総合文化研究所の研究誌であり、年一回、所員一人が責任編集する。創刊第一号はロシア文化、文学の亀山郁夫がその任にあつたが、今後当分の形式で発行してゆきたい。また総合文化研究というからには、当然外部にも開かれた研究誌でなければならず、今回のように所員以外の研究者にも積極的に協力を仰ぐ方針を堅持していくつもりである。

*lento, sed certo et recto gradu.* 「遅き、けれど確かにして真直ぐな歩みもつて」というラテン語の諺がある。これを、かなり遅く発足したわが東京外国語大学総合文化研究所のモットーとしたい。遅く発足したけれども、けつして焦ることなく、ゆつくりと着実に研究の歩を進めてゆく。ここに創刊する研究誌もまたそのようでありたい。

最後になるが、東京外国語大学総合文化研究所発足、および研究誌創刊にあたっては中嶋嶺雄学長はじめ本学の多くの方々のご支援、ご助力があつた。所員を代表して、ここから心からの謝意を申し述べたい。